

Eula の自殺：隠れた事実と真実

——Snopes 三部作論から——

森 田 孟

人間は単純ではない。だから単純なこともする。そう考えて、たとえば、ある人物の自殺の原因を単純なものと看做して満足することも出来なくなかろう。だが、Flem Snopes 夫人の Eula が自殺したのは、彼女が「うんざりした」(bored) からだ、という解釈は、読者を納得させるだろうか？ いや、自殺の原因としては、余りにも一般的なものの一つであると思われるゆえに、Eula の自殺の原因としては、その先、つまり、では何故にうんざりしたのか、が答えられねばならないだろう。

自殺とは、自ら自分の生命を絶つことで、行為としては甚だ明快で、単純であるが、その原因、動機、意味などは、決して一様ではあり得ない。しかし、意味の面から見れば、自殺は大きく二種類に分類することもできるだろう。積極的な自殺 (A) と、消極的な自殺 (B) である。(A) は、例えば、古代の殉死、中世・近世の諫死、現代の抗議死——反戦行動としての焼身自殺など——、あるいは、自分が死ぬほうがある他人が幸福になると信じてその他人のために選ぶ自殺など。この、他人のための自殺には、主君や親分のため、などという大時代なものから、妻子に生命保険金を取得させようとか、上司・友人・妻子などを庇うためとか、愛する人の身代りになる、などといった類のもので、何しろ、複雑にして単純な、つまり、それ程に複雑な人類のことであるから、社会が複雑多岐になればなる程、益々、色々と生じうるものであろう。要するに、(A) の場合、自殺者当人は、大なり小なりの希望を持っているであろう。少なくとも自分の死が無意味ではないことを信じて死ぬであろう。その意味で、当人にとっては必ずしも不幸のみではない、などというのは、しかし当を得まい。(A) の場合、自殺者たちは本当は、死にたくはないのである。出来れば生きていたいのが、誰しもの本音である。だから自殺せざるを得ない状況に置かれたことは、やはり不運であり、不幸である。

(A) に分類した自殺にも種々あり、まして、その理由、原因、動機となれば

千差万別であるから、自殺者当人の幸不幸感などは一概には言えないものではある。

(B)の消極的な自殺とは、要するに、この世に生きているのが嫌になり、うんざりした挙句の果ての自殺である。世を儚んで、前途に何の希望もなくなって、自己も含めて人間に絶望して、生き甲斐が皆無になって…の自殺である。この場合、自分が不幸だと思って自殺する者もあれば、自分の幸・不幸などは全く念頭に浮かばない自殺者もあるだろう。この(B)には、今の状態で生きているよりは死んだほうがましだと思って自殺する者も含められよう。(イ)精神上・肉体上の苦痛に堪え切れなくなって、それから逃れようとする自殺、例えば、病者の自殺や、他へ迷惑を及ぼした責任を感じての自殺、つまり自己の過失を償おうとしての自殺(自殺によっては必ずしも償えはしないのだが、そういう反省の余地がなくなるから自殺するのであるが)、あるいは犯罪者がこれ以上は逃げられないと覚悟しての自殺、あるいは受けた恥辱に堪えられなくなったの自殺(これは抗議の意味も帯びてこよう)等々である。それから(ロ)思想や宗教に殉ずる自殺、がある。己が信念・思想・宗教を棄てて生きのびるよりは、それを護ったまま死ぬほうがましだと考えての自殺で、殉教などである。こういうのは、警世の意味も帯びてくるが、そうなれば(A)に近づいてゆくだろう。(イ)と(ロ)に細分化はしてみたが、この(B)の(イ)と(ロ)は相互に重なる場合も少なくなかろう。また、(A)、(B)に二大別はしてみたものの、この両者に全ての自殺が分類され得るものではなくて、全くの中間のもの、中間にあって(A)か(B)に傾くもの等、種々なものがあり得よう。要するに単純ではない。

その他、これらの範疇に属さない自殺というものも考えられる。つまり、原因・理由・動機・意味など、自殺者当人にはもとより、第三者にも全く思い当らぬ不可解な自殺である。前途洋々として本人も希望に満ち溢れて張り切っている青年、愛情に恵まれて結婚式の当日をひたすら待っている幸福感一杯の少女、人生の輝かしい絶頂にあって意気揚々としている壮年者、未来の明確な目標に向って日々充実して励んでいる人、生きていること生き続けることに無上の喜びを感じ続けている人…こういう人々が或る日突然自殺する。そういうことが起り得ないと、誰が言えよう。しかも、突然その時、人生が空しくなった、などという理由も一切無しに、自殺の衝動に急襲されて自殺を実行してしまう、というような自殺である。不条理の自殺(C)、とでも名付けよう。こういうものが生じ得ない、と考えるのは不遜であるから、(C)の存在は認めるこ

とが出来る。そうなれば、どうにも十分には納得のゆかぬ、説明のつかない自殺は、全てこの(C)として片付けてしまうことができることになって、結局納得でき、説明がつくことになる。つまり、(C)を認めた途端に、(C)はもはや真の意味の「不条理」ではなくなり、「不条理」という名で条理の世界に組み込まれたことになる。人間は「不条理」を「不条理」のままにはしておけないようだ。説明の付かないものは、「説明のつかないもの」として説明しなければ気がすまないのである。

だから、それだけに、(C)をやたらには認めることは出来ない。一見(C)としか看做せないと思われる自殺も、深く検討すれば条理の立つものかも知れないからである。或る時、或る場所で、一人の人物に不条理な自殺の衝動が生じた場合も、よく調べれば、その人物の資質、体質、育ちなどに、そういう不条理な衝動がある時突然生ずる遠因が潜在していたことが見い出せるかも知れない。尤も、その見い出せたと思う遠因なるもの、あくまでも生き残っている第三者の推測の域を出ないものではあるが。それが、真の原因かどうかは、死者自身にすら判らないことであろうから。

その他、自殺教とでも呼びうる一種の宗教めいたものによる自殺も、人間の歴史上知られている。自然死を待つよりも、健康で幸福であるうちに自殺するほうが一層幸福であると思込まされての自殺である。これは、(A)、(B)、や(C)とも次元が違う自殺であるから(D)と分類しようか。その他にもまだあり得るかも知れない。

物体に慣性の法則があるように、生物には生命維持の法則の如きものがあって、生命を有するものは通常、ある期間は生き続けようとする。人間も勿論その例外ではなく、死は人間の最も恐れるものの一つであるのが普通である。いや、恐怖の最大の的であるといっても過言ではなかろう。だから、出来る限り生命を維持したいと希う通常の人にとって、自殺は殊の他説明を要する行為となるのだろう。

ところで、上記の四つの場合だけを今考えてみるのだが、その自殺者本人にとっては、死は本当に死なのだろうか。(C)の場合、文字通りの「不条理」の自殺であれば、これはあくまで不条理であって、当人にとって、自殺の死は死ですらないものであろう。死を生ずる行為という自覚もなしの行為で、いわば、魔が射した、とでもいう行為であるから。彼にとって、死は死であるか、などという問い自体無意味というものだろう。(D)の場合は、いわば催眠術にでもかかったような状態ともいえようから、この場合も、今の問いは無意味に響く

かも知れないが、これは、少なくとも潜在的には、彼らの死は死ではなくて、よりよい生の形態なのだと看做せそうだ。彼らにとって、自殺とは、生き続けることより幸せな状態を生起させることであるから、その死は、一層よく生きることを意味しよう。自殺教のようなものが成立するのでも又、人間が死を極度に恐れるからに他なるまい。自然死にしろ、事故死にしろ、共に、本人の意志に関わりなく、あるいは、本人の意志に反して人間を襲うものであり、そういう死なるものを恐怖するところから、自分の意志による死——自殺への志向が生まれるのではないか。とにかく、人間のみに限らぬが、生命のあるものは、いつかは必ず死ぬのだから。(B)の場合も、とにかくこの世にうんざりしての自殺、自分の生命などもうどうなってもよくなったの自殺などは、場合によっては無意識裡に、あるいは夢遊病状態や催眠術に陥ったような状態になって自殺行為を実行するのかも知れず、そういう場合は、よりよい生を求めての行為とは言い難いかも知れないが、とにかく、自殺行為を自ら選ぶのである。少なくとも潜在的には、やはり、彼らの死は、彼らにとっては、よりよい生の形態だと看做せよう。死ぬことすら面倒で、ただ惰性で死なないでいる(生き続けているのではなくて、死なないでいる)だけの人間も存在しうるのだから。思想や宗教に殉ずる自殺は、言うまでもない。(A)の場合は、勿論、この自殺者にとっての死は、死ではなくて、よりよい生の形態なのである。

こう見てくると、自殺者にとっての自殺という死は、多くの場合、実は死ではなくて、実際に生き続けることよりもっとよい一つの「生き方」なのだと言えるだろう。よりよい生の一形態なのである。死を最も恐れるのが正常な人間の精神だとしてもするならば、死を一層良い生き方の一つとする自殺者は、大多数を占める「正常」な人間にとっては大変気になる、心にひっかかる存在である。死を恐れる多数者も一層良く生きたいのだから。

自殺の説明が必要なのは自殺者にとってではない。生きて人間、生き続けたいと希っている人間にとってである。死を選ぶ自殺者には、自殺者の心理や論理があるわけであるが、それを、死とは正反対の生を希求する通常の者の心理と論理で説明することは、果して可能なのだろうか。しかし可能でなくても、何とか説明しなくては我々は気がすまないのである。ことは、自殺なのだから。ある作品の作中人物の自殺に、もし読者が納得がゆかなければ、その読者にとってその作品は大変ひっかかることになるであろう。

William Faulkner のいわゆる Snopes 三部作の読者にとって、*The Town* で自殺する Eula に納得できるか否かは重大な問題となるだろう。

*

Faulkner の作中人物で自殺をする者は Eula ばかりではない。主な例を若干見てみよう。*The Sound and the Fury* の Quentin Compson III がいる。この作品の第二部の語り手であり、*Absalom, Absalom!* の Sutpen の物語の構成に重要な役割を果たす彼は、病的に敏感な青年で、妹の性徳の有り方とそれによって一家の名誉が汚されたと考えて悩んだ末に、父親の奇妙な厭世哲学に毒され、妹への愛情は近親相姦の妄想にまで到って、妹の結婚後間もなく、Harvard の学生だった彼は入水自殺を遂げてしまう。夢遊病者のように一日彷徨った挙句自殺するこの青年は Faulkner の作中人物の中でもなかなか複雑で奇妙な魅力を持っているが、我々とはとにかくその自殺にひっかかりはしないだろう。肯定、否定、賛否、その他色々な反応は有り得るし、彼の自殺の真の理由や動機など、本当は判らないものかも知れないにしても、とにかく各人各様にではあっても、彼という人物に納得できそうだ。

Light in August の Hightower 牧師の妻が、印象深い自殺者である。彼女は Hightower の恩師の娘で情熱的な女性であったが、祖先の過去に取り憑かれて奇妙な説教に熱中して一向に自分を省みてくれない夫に衝撃を受けて精神に異常を来し、遂には、とある男とホテルに夫妻として投宿した果てに、その窓から投身自殺をする。その前に自分が Gail Hightower の妻である旨を紙片に書き付けて紙屑籠に投げ入れておいた、という手の込んだことをして、如何にも、この女性の痛ましさがよく読者に感取されるのだが、彼女の場合にも、我々は十分にその自殺に納得できるだろう。minor な登場人物ではあるが、鮮烈な印象を残す女性である。

そして Eula となるが、彼女はピストルで頭を射抜いて自殺する。自殺の手段一つとっても、入水、投身、ピストルと多彩である。

その他に、他人による自殺、とでも呼べそうな死が Faulkner の世界にはある。*Absalom, Absalom!* に登場する Charles Bon が Henry に殺されるのは、これは自殺行為と言ってよい。父親の Sutpen 大佐が実子と認めてくれさえしたら、彼は異母妹 Judith との結婚に敢えて固執はしなかったものを、Sutpen に失望した Charles は異母弟の Henry に自分を殺さざるを得なくして、Henry を殺人者にまでするという、これまた手の込んだ怨念の具象化ぶりである。つまり、そういう人物として、*Absalom, Absalom!* の中で組み立てられている。彼の心情や行動は読者を十分に納得させるものである。

Sartoris の Bayard 青年の死も一種の自殺行為と看做せよう。彼は双生児の

兄(弟)と共に第一次世界大戦で英国空軍に従軍して、その兄(弟)の戦死を目撃する。そのせいもあって兄(弟)の死の責任を不心要なまでに感じながら帰還した Bayard は、故郷で無謀な車の運転をしては心の荒廃を遺らわんとする。その挙句、事故を起して同乗の祖父を心臓麻痺で死なせてしまう。今度の死は、本当に彼の責任だが、いたたまれなくなって飛び出した彼は欠陥飛行機の試験飛行中、事故死を遂げるのである。帰還後の彼の行動には、自ら死の到来を招き急いでいる趣きがある。この Bayard の死については、*The Mansion* に興味深い言及があるので後にも触れることにするが、戦場体験を経た青年の心情の少なくとも一端は鮮やかに描破されていて我々を納得させるだろう。

Pylon の Roger Shumann の死も飛行機の事故によるものだが、彼もまた、どうも覚悟の死のように見える。欠陥のある飛行機と知りながらそれを操縦するのだから。彼の「家族」は、妻と、その妻を「共有」する職業降下士と、息子とから成るが、その子供は、生んだ妻にさえ、父親が彼なのか相棒の降下士なのか判らない状態である。現代の一夫一婦制の家族の倫理に超然とした「家族」だが、Roger にはその倫理や制度に挑戦しているような気負ったところなどは全く見られない。何か、奥底で人間に徹底的に絶望した挙句の静謐さのようなものが窺えて、その冷めた情熱というか、およそ情熱とは無縁なような情熱が不思議な感動を呼ぶ人物であるが、彼も Faulkner のいわゆる“demon””に取り憑かれた男の一人だったのであるまいか。彼の場合は、その“demon”が *Absalom, Absalom!* の Thomas Sutpen, *Light in August* の Gail Hightower 牧師などとは全く別様の現われ方をしたように思われる。

覚悟の死といえ、*Sanctuary* の Popeye はどうだろう。自動拳銃を常時携帯していて殺人を何とも思わぬこのギャングは、酒の密売人であるが、本人は酒を全く受けつけない胃弱者であり、人々を怖れさせる人物でありながら夜道での鼻の声に怯える臆病さを持ち、典型的な outlaw でありながら、「法ってものはなくちゃならぬ」などと何度か呟く...といった滑稽な皮肉を振り撒く。性不能者(“impotent”)であり、性異常者で、ある女学生をトウモロコシの穂軸で凌辱し、彼女を売春宿に連れて行って他の男と性行為を強制してそれを眺めて興奮する。その挙句、その男を射殺する。この Popeye は結局、とある殺人の罪を問われて絞首刑に処せられるのだが、その殺人に関しては彼は全くの無実であるから、ここにも又、痛烈な皮肉がある。ところで、Popeye はその際には、何ら弁明もせず、官選弁護人を采れさせながら平然と刑に服するのである。どうせ一度は死刑に逢わねばならない以上、誰の犯した殺人罪で処

刑されようと、どうでもよい、とでもいったこの人を喰った態度には、ぞっとさせられるが、自分が処刑されるのは、彼にはどうも覚悟の上のことだったのであろう。何しろ、「法ってものはなくちゃならねえ」(“There ought to be a law.”²⁰) からだが、しかし、これでは法は法でもとんだ法である。

“impotent” とされる点では Flem Snopes も同じであるが、彼の最後まで、覚悟の死のように見えなくはない。それについては後に触れるが、それはともかく Flem の像には、どこことなく Popeye に似た相が付着していることが注目されよう。Flem は勿論、Popeye のような outlaw ではないが、Gavin Stevens や V. K. Ratliff から見れば、Popeye のようなギャングでないだけに、一層唾棄すべき人物であった。Popeye にも Flem にも、やはり “demon” が、冷ややかに無感動に取り憑いていて彼らを動かしていることが看取されよう。そうでもなければ、めったに彼らのように生きられるものではなからう。

勧められた自殺を拒否して、牢獄に生涯を送るほうを選ぶ人物 (*The Wild Palms* の Harry Wilbourne) も Faulkner の世界には存在するが、彼の世界に登場する自殺、ないしそれに類する死を、一瞥してみても、いずれもそれぞれに読者は各人なりに納得できるのではなからうか。だが、Eula の場合はどうだろうか。

*

Eula は、Old Frenchman's Bend のいわば、支配者である実力者 Will Varner の娘で、16人兄弟姉妹の末子であった。それだけで、甚だ多産豊穡な家系の体質が暗示されるようだが、肉体的に早熟で、早くから男心をそその圧倒的な肉体美人になったが、救い難いまでに懶惰な少女で小学校にも歩いて通わなかった。いわば地上に落ちて毒々しくつぶれた熟柿という趣きで、近隣はもとより通りがかりの他所の青年たちの欲情をそそり続け、16歳の時に、他所者の青年 Hoake McCarron と初めて肉体関係を持つに到り、すぐに妊娠する。それを知って McCarron は逃亡する。彼女を未婚の母にしないために、Will Varner に選ばれたのか、選んだのかしたのが Flem Snopes で、Eula は受動的に Flem Snopes と結婚する。Flem は持参金付きで Eula を妻とし、世間の眼を誤魔化すために Texas へ一年余り新婚旅行に出かける。そうして生まれた赤ん坊が Linda であり、その Flem たちの留守中に、Mink Snopes の Houston 殺しが起きるわけであるが、Linda や Mink の物語は、この *The Hamlet* の次の *The Town, The Mansion* で展開される。

The Hamlet で明らかになる Eula 像は、要するに、およそ知性とは無縁の女性である。ところが17年後に上梓される *The Town* で、Eula 像は変容する。*The Hamlet* の Eula からは *The Town* の彼女は想像し難いものではあるが、実際に *The Town* で彼女の姿に出合えば、この二作の間の Eula が同一人物であることを認めるのに別に困難はないだろう。*The Hamlet* は Eula の一面のみを特に強調して提出したものと見ればよく、また、Faulkner の発言通り³⁾彼女も成長していったと考えればよい。しかしとにかく *The Hamlet* の Eula が、死とは結びつき難い生のイメージで描かれていたことは確かであるが Eros と Tanatos とは本来無関係なものではない。生と死が対極にあるものの如く先刻来述べてきたようにみえるかも知れないが、生と死は表裏一体のものであり、紙一重のものかも知れず、あるいは、正反対の方向で円環を成すものかも知れず、そうなれば、始点と終点は同一のものである。*The Hamlet* の生殖の権化のような Eula の相は、*The Town* で自殺する彼女を、既に予告していたものかも知れぬ。

The Hamlet—The Town の17年間の時間は作中人物たちの経験した時間でもあって、*The Town* では、Eula と結婚して「成り上り」の手がかりを握んだ Flem が、村 (Old Frenchman's Bend) から近郊の町 (Jefferson) へやってきて、そこで「成り上り」を続けて、遂にその町の銀行の頭取 Manfred de Spain を逐いおとしてその地位を継ぎ、Manfred de Spain の住んでいた邸宅を買い取って改造し、州最大とも目される大邸宅の所有者となるに到る。三部作の作品の標題の通り、「村」から「町」へ、更に「館」へと Flem が変遷・上昇してゆく過程であるが、Flem の「成り上り」は、勿論彼自身の「才覚」によるが、それに大きく与ったのが Eula の行動であった。彼女は、夫 Flem と、旅の間に生まれた McCarron との間の子供 Linda と共に旅から故郷に帰ってきてから間もなく、件の銀行家 de Spain の情婦になる。以後18年間 Flem の妻のまま、その状態を続ける。Flem は黙認し続けるが、de Spain が町長の時に町の発電所の監督官に Flem になるのも、また、de Spain が頭取を勤める銀行の副頭取に Flem になるのも、そして遂には Flem が de Spain を駆逐するに到るのも悉く Eula と de Spain との間関係が与っている。つまり Flem は妻の Eula を最大限に利用して己が野望を達成した文字通りの“Snopesism”の権化ということになるが、さて、この Flem 像が形象化される *The Town* は、Charles Mallison, Gavin Stevens, V. K. Ratliff の三人の語りによって構成される作品であることを忘れてはならない。ところ

で、Millgate の興味深い示唆は、この三人の語りの特質は、【順に、事実、理論、真実の様相を帯びているのではないか、というものが⁴⁾、もし当てれば、胸のすく眼力と賞讃したいが、当を得ているとは認め難い。何故なら Gavin も Ratliff も、作中から明らかなように事実の語り手・報告者としては甚だ不適當な人物たちなのである。Gavin は願望を即事実と考えたがり、信じたいことを信じ、信じたくないことは信じない人物であるし、Ratliff は、実際に起きたことよりは当然起きる筈のことのほうを採る、と公言する人物である⁵⁾。事実よりは事実の筈のことを信ずる人物に、真実が見えるとはとても思えない。理論は真偽とは非関係であるから、つまり、正しい理論もあれば、間違った理論もあるので、Gavin の語りの視点に理論の性格を見る Millgate に、賛成してもよいが、但し Gavin は理論のみを語るわけではないし、その理論も多くは真偽の程は疑わしい。甚だ歪んだ視点で語る人物なのである。The Town は Gavin が主人公といってもよい作品であるだけに、彼の役割は重要である。Gavin の Flem に対する視点は Flem への嫌悪感から特に歪んでいることが読者には痛感されるであろうし、Eula や Linda に対する視点は、彼女達への愛着ゆえにこれまた大変歪んでいることが看取される。

Charles の語りの事実性についても Millgate に賛成はできかねよう。年少者の眼に対する Faulkner の信頼は、早くからその作品や作者自らの発言によく現われており、それはそれなりに首肯もできるが、年少者が常に事実だけを見るとは限らない。それどころか、年少ゆえに見えない事実というものもこの世には少なくないし、年少者には年少者特有の嘘を、罪悪感なしにつくという面もある。更に、「思い込み」ということは年齢に関わらず誰にでも起り得る現象であるし、錯覚もまた珍しいことではない。それに Charles の語りは、Charles 自身が自分の眼で見たことのみを報告ではない。従兄 Gowan から聞いたことの他に、彼は叔父 Gavin の影響を当然ながら強く受けており、冷めた態度で賢しかな物言いをする Ratliff の言葉を少年の素直さで相当に信じ込んでいるのである。The Mansion には、Charles が、Gavin と Ratliff の話を長い間きかされてきたために、二人の記憶していることは、殊に Ratliff の覚えていることは自分も確かに知っていると思い込んでいたとある (p. 359)⁶⁾。「彼には Ratliff が、再びこう言っているのが殆ど聞えるように思われた」(he could almost hear Ratliff saying again :) (pp. 359-60).

この、「殆んど聞えるみたいだった」(could almost hear)、「まるで眼に見えるようだった」(could see)、「想像できるようだった」(could imagine) という

のは、Faulkner の登場人物の語り手たちの得意とするところであるが、「殆んど聞えるみたいだった」ことが、実際に聞えたことと同じではなく、「見えるように思われた」ことが、実際に見えたことと同じとは限らない。「想像できる」ことに到っては、あくまでも「想像できる」ことにとどまろう。Flem の最後が近づいてきた時のことだが、彼の護衛を自ら密かに買って出る人物がある。ところが、この人物もまた、想像力の豊かな(?)男で、Flem が Mink に襲われる場面を「ありありと心に思い描くことが出来た」のであった。(He could visualise it:) (*The Mansion*, p. 409). Flem が救いを求めて絶望的な叫びをあげて足掻くところへ Mink の凶器が振りおろされんとする。その瞬間に自分がピストルを持って飛び込んでいって、一発で、その人殺しを倒す。というもので、その時の Mink の表情の変化まで、この男は“visualise”出来たというのだが、これが全く事実とは似ても似つかぬもので、実際は彼は、この殺人の現場に居合わすことすら出来なかったし、Mink は全く想像外のピストルで Flem を殺すことになるが、Flem は平然と静かに殺されるのである。Faulkner 自身が、“could hear (see, imagine, visualise, etc.)”と実情との差違を示してくれていることになろう。*The Mansion* は、“Mink”, “Linda”, “Flem” の三部から成るが、「1」から「18」まで、通して、いわば、18の部分から成り立っている。今、全体が18章から成っていると看做しておくが、第1章～第5章までが“Mink”の部、第6章～第11章までが“Linda”の部、第12章～第18章が“Flem”の部となる。Mink の部の五章中、第3、第4の二章が、それぞれ Ratliff と Montgomery Ward Snopes の語りであるが、他の三章は神の位置にある作者の語りの体裁とみてよかろう。Linda の部は全て作中人物の語りの集成から成り、第6、第7章を Ratliff が、第8、第9、第11章を Charles が、残りの第10章を Gavin が語る。感情の点で最も Linda に深入りしている Gavin の語りが一章のみというのは、さすがに作者はよく心得ていると言うべきであろう。*The Town* の後では我々は、Gavin の語りは事実と真実という点に関して余り信用できないのである。

Flem の部は、第12章から最後の第18章まで全て、神の位置に立つ作者の視点からのもので、作中人物の語りの体裁は全く採っていない。しかし第12章～第15章までは Gavin の登場に際して“his uncle”なる説明が付くことが多く、“he”なる代名詞が Charles を指すことが殆んどで、この四つの章は Charles の語りの体裁は採っていないものの Charles の視点にかなり近い語りになっていることが注目される。最後の三つの章が作者の視点に移行してい

るのが看取されよう。Flem の部は、一見、同じ視点からのものに見えても、第 12 章～第 15 章と第 16 章～第 18 章とでは微妙に異なっていると看做せよう。三部作の最後の締め括りの部分に当る *The Mansion* の Flem の部に、作中人物の語りの体裁を採らず、前半と後半とで微妙な差違を見せながらも神の位置に立った作者の視点をういたところに、作者 Faulkner が、この Snopes 三部作に対して自己のはっきりした態度を示したことが窺えるように思われる。つまり、Flem の部は、後半は特に、事実が提示されていると看做してよいだろうということである。Ratliff に、Linda は出獄した Mink が何をやるかは判っていたかも知れないし、Flem も知っていたのだろうと言われた Gavin は、「そんなことは信じたくない!」「信じられない」と絶叫する。(“I wont believe it!” Stevens said. “I wont! I cant believe it,” he said. “Dont you see I cannot?”) (p. 431). Gavin が、真相、真実を見ようとせず、信じようとしぬ人物であることが、ここで駄目押しされるのではないか。第 13 章は先刻述べたように Charles の視点に近い章であるが、そこでは Charles の叔父 Gavin や Ratliff のような「幻想家たち」“*illusionees*” (p. 304) ともちゃんと述べられている。Charles はそういう Gavin や Ratliff の影響を受けているのである。*The Town* の Charles の語り、どの位事実であり得るだろうか。

The Mansion の構成に若干触れたのは、*The Town* の語り手たちの本質を、この締め括りの作品が一層明らかにしてくれることを言うためであった。Gavin, Ratliff, Charles の三人の語りから成立するのが *The Town* という作品であり、その作品の中の Flem 像も、Eula 像も、彼らによって浮かび上がるのである。

Flem が Eula をもし「利用した」というのなら、Eula の側も Flem を「利用した」と言えるであろう。Eula が未婚の母となって世間から非難されるのを防いだのは Flem である。Flem は “*impotent*” だと Gavin たちにはされているが、もし事実だとしたら、Eula と de Spain との長年の情交関係を Flem が黙認していたというのは、Flem の Eula への「愛情」だとは考えられないのだろうか。また、自分の肉体上の欠陥のせいで妻が他の男の情婦になっているとすれば、自分自身にも弱みがあるのだから妻やその男をそれ程責められるかどうか。Eula や de Spain は、Flem から弱点を突かれて護歩を続けていったように描かれるが、これは相当に弱みがあったからではないか。他人の弱点を突いてそれを利用するのは明らかに卑劣であるが、Flem が利用

したとされるような弱点は、持つほうもおよそ立派とは言えまい。私は Flem が “impotent” でない、などと看做しているのではないが、何か釈然としないのである。Eula が Flem と離婚しなかったのは、成長した Linda に「他の子供たちは、私が持っていないものを持っている」“Other children have got what I never had.” *The Mansion* p. 145) と嘆かせないためだったとされるが、これもどうも変ではないか。離婚しても再婚すればよいのであり、Flem は Linda の実父ではそもそもないのである。*The Hamlet* のみではなく *The Town* においても、Eula は男にとって甚だ魅力に溢れる女性とされているのである。Eula は二度、自ら Gavin に自分の身体を提供しようと申し出たとされている。一度は Gavin が de Spain に嫉妬して彼と殴り合いを演じた後のことで、彼女は Gavin がそれ程自分に恋い焦れているのならと彼に同情したからだとされているが、勿論 Gavin は、同情からそのような申し出は受けられないと断った。二度目は夫の Flem を有罪にする訴訟を起こさぬよう頼みに来て、その代償に、というのだが、これも勿論 Gavin は断った。*The Hamlet* の Eula 像から如何にも無理なく出てくる彼女の姿である。

Flem は 18 歳になった Linda に、彼女が母親の Eula から相続する全財産を Flem に譲る旨の遺言状を作成させ、それを使って Will Varner を動かし、de Spain を頭取の地位から逐い払うことに成功した、というわけだが、Flem が奸計によって Linda に父親としての自分を愛させたというのは何だか変であるし、Will Varner はその時になって初めて Eula と de Spain との関係を知った、というのも奇妙である。この二人の関係はその社会では公然と知られていたが、人々というのは親切なものだから、Will の耳には入れなかった、というのである (cf. *The Town*, p. 340)。誰にでも盲点はあるから、Will ほどのしたたかな人物の場合でも、それで納得できないこともないが、やはり変であろう。いずれも Gavin を中心にして *The Town* の中に出されている姿である。

Eula は de Spain と駈落ちする決心をするが、その際 Linda の処遇を心配して、Gavin に頼みに来たという。Linda を慈しんでくれる Gavin が彼女と結婚してくれれば彼女は一番幸せになるからと。Gavin は結局、それ以外に本当に Linda の幸せがないと分れば彼女と結婚すると Eula に誓うことになる。その直後に、Eula は自殺する。呆然とした Gavin は Eula の自殺の原因を Ratliff に問う。「多分うんざりしたのだろう」というのが答えであった。Gavin もそれで満足しようとする。(“Maybe she was bored,” Ratliff said.

“Bored,” Uncle Gavin said. Then he said it again, not loud: “Bored.” *The Town*, pp. 358-59). これは *The Mansion* でも復習されている。Ratliff が語る。(“Maybe she was bored,” I says, and he says: “Bored. Yes, bored.” . . . “Of course she was bored.” p. 150).

Ratliff は、最後に超然として殺されて果てた Flem についても、「うんざりしたのだろう」「Eula 同様に」と評している。(“Maybe he was jest bored too,” Ratliff said. “Like Eula. Maybe there was two of them. The pore son of a bitch.” *The Mansion*, p. 430)

先刻後に触れると述べておいた *Sartoris* の Bayard 青年の帰還後の行動について、Gavin はやはり「うんざりした」からだと解釈している。(“That’s right: boredom, Uncle Gavin said . . . and that Bayard was simply bored: *The Mansion*, p. 189)

Gavin も Ratliff も、「うんざり」をもち出すのが好きなようだ。何でも「うんざり」で片がつけば世話はない。

Eula が自殺したのは「うんざり」したからだとしたら、では何故「うんざり」したのか。Gavin はこう考えて納得したらしい。「自分 [Eula] の愛情を受け入れてくれるだけの勇敢で強い男を [Gavin に] 見出そうとして二度とも失敗したから」だと (cf. *The Town*, p. 359, *The Mansion*, p. 150.)。どうもどこまでもいい気なものである。

ところで、Eula は、娘の Linda に、母親が夫のある身でありながら他の男の情婦であったと分るよりは、自殺した母親であるほうが衝撃は少なからうと思って自殺したのだろうと解釈されている⁷⁾が、これも勿論変である。人は色々な理由で「うんざり」し得るものであるから、とにかく Eula も「うんざり」して自殺したのだとすれば、これは先刻の分類の (B) の (イ) の自殺になるが、Linda のために思っての自殺となれば (A) の部類の自殺となる。Millgate は、もし Gavin が Linda と結婚すると約束すれば、Eula の自殺は防げたのではないか、などと示唆⁸⁾するが⁹⁾、これは如何であろう。必要があればそうすると Gavin は Eula に何度も誓わせられている (*The Town*, p. 334.) のだから。Eula の自殺は *The Town* の最大の失敗であると断定する評者⁹⁾もあり、Eula の自殺には、色々と問題がある。どうも納得でき難いからである。かといって、先刻の (C) 不条理の自殺、と片付けたりするのは、「うんざり」したからだ、とするよりもっと読者の怠慢になるだろう。

要するに、何か事実が、見えないままにされているのではないか。

*

The Town には、女性論とも絡めて真実・事実談義、のようなものが盛んになされている (cf. pp. 88, 226, 330-31 etc.)。事実と真実についての省察は Faulker には早くから、自分自身の発言としても、作品の中で作中人物の科白としても見られるものであるが、*The Town* の中の議論は、議論自体の面白さばかりが問題になるのではなく、この作品の中の、事実と真実に、読者の注意を惹く役割を荷なわされているものでもあろう。

事実とは、実際に時空上に生ずることであり、直接経験の対象として眼に見えるもの、であるが、真実とはその意味が問題になるものである。例えば、ある男がある女を今殴ったとする。この殴ったという事象は一つの実事である。ところで、それはその男がその女を憎んでの所作か、愛しているの行動か、その女にとって悲しいことか、悔しいことか、つらいことか、うれしいことか。これは、その場合、場合で異なり、それぞれその場合、場合に正しく当て嵌るものが真実である。これこそ、Faulker の最後の作 *The Reivers* の中で、黒人の Ned が Lucius 少年に覚らせたことでもあった。未だ、売春宿のおかかえ笑婦であった Everbe は、愛する Boon を救うために一夜、権力を振り回す副保安官に身をまかせたが、それを知った Boon は Everbe を殴りつけて、Lucius 少年を憤慨させた。その少年を Ned がなだめるのである。女にとって男に殴られて眼に痣をつくることは嬉しい場合もあるのだと。¹⁰⁾ Faulker の世界には、しばしばみられる、事実・真実の様相なのである。

愛している女を殴る筈はないから、その男が女を殴ったのは、そう見えただけで、誤って掌が顔に当たったのだ、ともし看做したなら、その時、その一つの事実は、事実としては捉えられなかったことになる。だから先刻も触れたように、「当然そうあるべき」ことは「そうあった」ことにはおよそならないのである。また、殴った、という事象が生じてもそれは「殴った」という事実ではなくて、そう見えただけで、「誤って掌がぶつかった」というのが事実の場合もあるだろう。

Faulker が作中で「事実」を提示する仕方は幾通りもある。(1) 三人称の従来の描き方で、つまり、神の位置に立った作者の視点で、「事実」を提示する場合。その場合も (イ) 同じく「事実」と見えながら、実は「事実」でないものを提示する場合。(ロ) その事象が、幾通りかに見えて、何が「事実」か、つまり、どれか一つの事象と見定めにくいものを提示する場合。(ハ) その場合に、作中人物を登場させて、その人物にその事象を、一つの「事実」に定め

させる場合。ここにも、それが本当に「事実」なのか、それとも、その作中人物の見誤りなのか、あるいは、その作中人物が「事実」と定めたものの事実性は曖昧・不明なのか、等々色々の場合がある。(二) 複数の登場人物に、「事実」に対してそれぞれ異なった捉え方をさせる場合。この場合も読者は困惑するだろう。…(II) 誰か特定の作中人物の視点による語りを用いる場合。この場合にも (I) の場合のような (イ) (ロ) (ハ) … の場合がそれぞれある。

そういうものを読者は読まされるのである。Snopes 三部作は *The Hamlet* は全部、三人称の語り、つまり、神の位置に立った作者の視点で提出され、*The Town* は三人の登場人物の語りの中の組み合わせによって成立し、*The Mansion* は先き程もみたように、それらの混合に依っているというように、手法が異なっており、それらによって Flem や Eula の物語は提出される。

この三部作で現われる Flem や Eula, Linda などの姿には、何か、見えなくなっている部分が当然あるだろう。隠されている、あるいは、隠れている事実や真実などがあるに違いない。Faulkner は、作品そのものによってそう訴えているのである。Flem は冷血動物のように描き出されているが、*The Mansion* の最後では、彼の葬儀が盛大に行なわれた様子が描かれている。これは、作中人物の語りによって提出されるのではない。多分、実際に、Flem の死は多くの人々が悼んだのではないか。Flem は「館」に移り住んだ後、何を喜びとして生きていたのだろうか。何か、楽しみや、喜び、生きがいはあったのではないか。それは、作品の中ではどうも描かれていない。最も不思議なのは、Eula, Flem, Linda の間の「愛情」の相が、奇妙なまでに欠落していることである。これらは、読者が読みとらねばならぬことであろう。作中人物ですら、あることに関して「我々は判明している僅かな事実に基づいて推測しなければならなかった」などと述べているのである (cf. *The Mansion*, p. 142 など)。まして読者においておや。

Eula の自殺がもしひっかかるとしたら、それは、何かが見えないからであろう。作中に一つの極限状況である自殺というような事象が存在し、しかも、それが普通にはどうも納得し難い、ひっかかるものであるとすれば、それはその作品の中で、事実や真実の何か我々の眼から見えないように隠されているからにちがいないのである。

Snopes 三部作の中で隠されている事実・真実の重要なものの一つは、Eula—Flem 間の「愛情」ではあるまいか。そして Flem の実際の生き方の有様と、その意味についても又、隠されている事実・真実がありそうである。Eula

の自殺は、Eula と Flem との間に「愛情」が存在したと見れば、我々に十分納得がゆくものとなるだろう。先刻も述べたように、かつて Eula は、Flem を有罪にしないために、自分の身体の提供を申し出たとされている。彼女の行為は、*The Reivers* の Everbe のそれと同じであるが、Gavin は勿論、それは Eula の体面 (respectability) を慮った行為としか見なかった。Eula の死後、Flem は、彼女を追悼して大理石の立派な記念碑を建てるが、それも Gavin は Flem の体面上からの世間を欺く行為としか看做さない。だが、それは真実だろうか。特別の見方をしなくても、Eula と Flem との間の「愛情」は、むしろ自然に見えてくるのではあるまいか。Flem が遂に頭取になったことは、Eula には、夫が年来の望みをすっかり達成したことに見えたであろう。あとは Linda のことだが、これも、Gavin が将来のことを受け合ってくれた。彼は、先刻もみたように「誓」ってくれたのである。

彼女にはもう思い残すことはない。彼女はほっとしたのである。Eula の自殺は、永年に互って自分と de Spain との情事を黙認し続けてくれた夫 Flem に対する感謝と謝罪の感情のなせる業であった。つまり Flem は Eula を愛していたのだ。そして、それを、Eula も知っていた。だが、彼女は、もうこれ以上生きていることは出来なかった。彼女の倫理感だったのだろうか。

Eula は「うんざりした」のではなくて、「ほっとした」のである。Ratliff は、見間違えたのだ、いや、言い誤ったのだ。それとも、Gavin の心を知っていた彼の思いやりだったか。彼は “bored” ではなく、“relieved” (ほっとした) と言うべきだった。

¹⁾ Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, eds., *Faulkner in the University* (New York: A Vintage Book, 1965) p. 120.

²⁾ Random House 新版 (1958) p. 94.

³⁾ cf. 既出 *Faulkner in the University*, p. 118. など。

⁴⁾ Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (New York: Random House, 1966), p. 237.

⁵⁾ 拙稿「深化の転回点：『町』——Snopes 三部作論から」(「英語青年」1980年10月号 pp. 2-6.) 参照。本稿はこの続稿である。

⁶⁾ 使用 text は Snopes 三部作は全て三巻本セット版 (Random House) による。

⁷⁾ Charles Mallison によって (*The Town*, p. 340.) 及び Ratliff によって (*The Mansion*, p. 145.)

⁸⁾ Michael Millgate, *op. cit.*, p. 242.

⁹⁾ Dorothy Tuck, *Crowell's Handbook of Faulkner* (New York: Thomas Y. Crowell Co., 1964) p. 85.

¹⁰⁾ Random House 版 p. 263.